

むかし「局アナ」いま「隠居」 レコードコンサート



上田 博章(絵・文)

1933年徳島市生まれ 大阪府在住
 ■京都大学農学部林学科卒業
 ■元朝日放送アナウンサー
 ■元池田マルチメディア代表取締役
 ■講演、朗読指導など以外は隠居中



「レコードコンサート」なるものが、世の中にあったというところをご存知の方は、かなりお年を召しているのではないのでしょうか。

一九五〇年代、この国がさほど豊かではなかった頃、普通の家には音響機器などありません。

ですから、放送局などが本格的なオーディオ機器を備えたコンサートホールで、「いい音のレコード音楽」を提供するというコンサートでした。

今にして思えば、何だか貧しくも哀しいコンサートだったような気がします。

昔、朝日放送が中之島の新朝日ビルにあったころ、地階にABCホールという五百席ほどの劇場を保有し、公開放送や、映画の試写会、講演会、時には朝日放送の労働組合が集会を開催したこともありました。

夕暮れ時、このホールでレコードコンサートを開催しますと、場所がいいので勤め帰りのサラリーマンではほぼ満席になるほどの盛況だったのです。

薄暗くて、少し離れると誰が誰だか判らない客席は、紫っぽいブルーのライトに包まれていました。

定刻に「ブザー」が鳴ると、下手から女子アナが登場し、ゆったりとした口調で曲目の紹介が始まります。

「ベートーベン作曲、交響曲第×番、演奏は〇〇です」

余計なことは一切喋らずスリーと姿を消さなければなりません。

曲目はクラシック音楽が主流でした。

*

近畿の某民放局が開いたステレオコンサートの席で、実はこんな出来事があったのです。

その日は、ポピュラーな歌曲の数々を聴いてもらう趣向で、司会の女子アナも出番が多く、次から次へと曲目を紹介して行きました。

何曲目だったでしょうか、彼女は静かな口調で、次の曲目を紹介します。

「続いて、〇〇〇の演奏でお聴きいただきましょう。シューベルト作曲、シヤケ」

せめて、「さけ」だったら、

お客さんも、「あッ鱒と鮭を間違えたな」とでも気づいて、笑って頂けたかもしれません。

「シヤケ」なんて言われると、あまりにもシューベルトとかけ離れていたからなのか、客席が一瞬シーンとなり、そこへ、シューベルトの「鱒」が軽やかにスタートしたのでそうです。



「Qシート」と呼ばれている細長い用紙に曲目、演奏者、歌手、秒数などが横書きで記されており、タレントやアナウンサーはQシートを見ながらレコードを次々と紹介して行くのです。

当日担当の女子アナは、軽音楽が聊か苦手だったようです。

「それでは、次の曲です。トリーケンズ・の歌で、ライオン跳ねている」

威厳に満ちたライオンがピョコピョコ跳ねまわってどないしますねん。

お古いナンバーとはいえ御存知の方が多いでしょう。

「ライオン はねている」

「ライオンは ねている」

切り方次第でエライ違いです。

Qシートに、

「ライオンは寝ている」

と漢字で書いてくれたら助かったのにねえ：



あのころのDJ番組は、歌謡曲やポップスが主流で、クラシックやウエスタン、ハワイアンなどは、滅多に放送されませんでした。

そんな御時勢で、珍しくハワイアンの曲を紹介する運命になったのは、やはり近畿の某ラジオ局の若い女子アナだったそうで…

「次の曲はハワイアンです。大橋節夫とハニーアイランダーズの演奏で、小さなケケの橋ッ。」

スタンダードナンバーですから、もうお察しでしょう。

Q シートは横書きですから「竹」という漢字を、左と右の二つに分解して片仮名で読んだのでした。

*

日本人の暮らしが豊かになって音質のいいレコードプレイヤーが普及しますと、レコードコンサートも少し陰りを見せはじめましたが、それを見越したかのように今度はステレオレコードが登場したのです。

ステレオのプレイヤーはまだ出回っていません。

レコードコンサートは「ステレオコンサート」と銘打って、少し長続きしたようです。

今でこそ、中波ラジオもステレオ放送が出来ますが、昔は技術的に無理でしたし、一般家庭のラジオも、殆どスピーカーは一個でした。

しかし二つの電波を持つNHKは、第一放送と第二放送を使って「立体放送」を早々と手掛けていたので、ステレオ音楽にも直ぐさま対応できたのです。

迫り来るステレオ時代にステレオ放送が出来ない、そんな民放ラジオでしたが、一九五九年二月、大阪ではライバル同士の朝日放送と毎日放送による共同制作で、「民放初のステレオ放送」をやったのけました。

その番組の初代担当者は、^{はばか}憚りながら、朝日放送 新人アナの私だったのです。

「恐れ入りますが、二台のラジオをご用意します。左に朝日放送、少し離して、右側のラジオを毎日放送に合わせて頂いて、あなたがラジオの前で、正三角形に

なる位置に座して下さい」

毎週々々、番組の冒頭でこんな説明をしたあとで、ステレオレコードをかける60分のDJ番組でした。

提供スポンサーは、将来ステレオ関連機器の販売を目指す松下電器だったので、番組主催の立食パーティーの席では松下幸之助さんに紹介され、ご挨拶したあと、少し言葉を交わしたこともあったのです。

「セカセカ喋る小柄なお人」という印象でした。

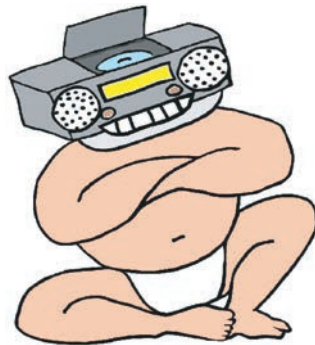
その席で、幸之助さんの娘婿、松下正治 副社長が、隣に立っていたのですが、副社長の顔を知らなかった朝日放送の課長が、幸之助さんの写真を撮ろうとして、正治さんに、

「ちよつと横にどいてんか」というゼスチャーをしたものですから、周りの者がオロオロしたのが、可笑しかったですね。

*

ステレオ放送やステレオレコードが日本に来るまで、「ステレオ」という言葉は馴染のない外来語でした。

ところが、このところ、「ステレオタイプの人物」というような言い回しがよくテレビや本の中で登場するようになりました。



ステレオ音楽が、幅広い空間から迫り来る立体音楽というイメージや先入観があることから、

「ステレオタイプの人物」というと、幅広い視野を持つ人物、幅のある人物：だと勘違いしているお人が多いのではないだろうか。

しかし、本来は、「固定観念の持ち主」という意味なのです。

「むかし局アナ」だった私は商売柄 一応、本当の意味を承知していました。

でもその語源については調べもせず、辞書も引かず、ほったらかしにしてあったのです。

最近、家内も逆の意味に取り違えていたことを知り、久しぶりに、英語の辞書を引いてみたところ…

「stereotype → 鉛版印刷、鉛版印刷物、固定観念、型に嵌った考え方、云々」となっていました。

*

実は先達で、大阪在住の旧制 徳島中学の同窓生が、五人ほど集まってビールを飲みながら昼食を楽しんでいたのですが、その席で、「ステレオタイプ」について、意味を訊ねてみたところ、私を除いた四人が四人とも「幅広い視野を持つている」というようなエエ意味とチャウか？」

と言うではありませんか。中に、傲慢な一人がいて、「みんなそう思うてるから、それでエエやんか。言葉は、そうやって徐々に変わって行くもんやで」

御意。言葉は時とともに変化して行くものです。

しかし、辞書も引かずに外来語を逆の意味に変えてしまうのは、聊か乱暴だと私は思いましたけどね。